

1919-1949



中国新民主主義革命史

李 新 著

中国新民主主義革命史

(1919—1949年)

李 新

外 文 出 版 社

北 京

中国新民主主義革命史

1980年 初版発行

著 者

李 新

出 版 者

外 文 出 版 社

(北京阜城門外百万莊)

発 行 者

中国国際書店

(北 京 P. O. Box 399)

取 扱 店 東 方 書 店(東京) 亜 東 書 店(東京)

中 国 書 店(福岡) (株)内山書店(東京)

(株)満江紅(東京) 朋 友 書 店(京都)

(株)燎原書店(東京) 中 華 書 店(東京)

編号: (日)11050-133

11-J-1486P

00080

出版者のことば

中国の近代史は、イギリスが中国侵略のアヘン戦争をひきおこした一八四〇年からはじまる。一八四〇年のアヘン戦争から一九一九年の「五・四」運動の前夜までの、約八十年間にわたる歴史は、旧民主主義革命の時期である。一九一九年の「五・四」運動以来、中国のプロレタリア階級が政治舞台に登場し、一九二一年に中国共産党が誕生した。これ以後、中国人民の反帝・反封建の民主主義革命は、新たな段階に入った。一九一九年の「五・四」運動から一九四九年の中華人民共和国成立にいたる歴史が本書で扱っている新民主主義革命の時期である。

執筆者の李新氏は、中国社会科学院近代史研究所の研究員兼副所長である。本書は、中国の新民主主義革命の闘争史を簡潔に、わかりやすく書いたものである。

目次

一	「五・四」運動……………	1
二	中国共産党の成立……………	12
三	労働運動の最初の高まり……………	18
四	「五・三〇」運動……………	26
五	北伐戦争……………	33
六	蒋介石の裏切り……………	40
七	農村革命根拠地の樹立……………	48
八	反「包囲討伐」の勝利……………	58
九	二万五千華里の長征……………	65
十	「一二・九」運動……………	76
十一	西安事変……………	83
十二	抗日戦争の勃発……………	91

十三	敵後方抗日根拠地の樹立……………	99
十四	国民党の反共攻勢の撃退……………	107
十五	解放区の反「掃討」闘争……………	118
十六	抗日戦争の勝利……………	128
十七	米・蔣「和平」陰謀の破産……………	136
十八	蒋介石の軍事進攻の粉碎……………	149
十九	解放戦争の勝利……………	159

一 「五・四」運動

中華民族の偉大な祖国は国土が広く物産が豊かで、人口も多く、世界でもっとも早くから文明がひらけた国のひとつである。世界の他の諸民族とおなじく、中華民族も長期にわたり階級のない原始社会をへてきた。原始社会が崩壊すると、階級の対立する時代にはいり、奴隸社会と封建社会を通過した。一八四〇年に、イギリスが中国侵略のアヘン戦争をひきおこしてから、中国は一步一步、半植民地・半封建の社会へと転落していった。帝国主義と封建主義は、二つの大きな山のごとく、中国人民の頭上に重くのしかかっていた。中国人民は帝国主義と封建主義の抑圧に反対するために、百余年（一八四〇年～一九四九年）にわたる艱難^{かんなん}辛苦の闘争をおこなった。しかし、旧民主主義革命の時期（一八四〇年～一九一九年）には、労働者階級による正しい指導がなかったため、農民戦争を通してうち建てた太平天国（一八五一年～一八六四年）や一九〇〇年の義和団運動にせよ、ブルジョア階級の指導した革命運動——辛亥革命にせよ、いずれも帝国主義と封建主義の強大な反革命勢力にうちかつことができなかった。中国の労働者階級が政治のひ

のき舞台に姿をあらわし、中国共産党が誕生してから、つまり、中国革命が新たな段階——新民主主義革命の時期に入ってから、中国人民の革命闘争ははじめて勝利の道をあゆむようになったのである。

一九一四年、第一次世界大戦がぼつ発すると、イギリス、フランス、ロシア、ドイツなどの帝國主義は、ヨーロッパの戦争に忙殺され、東方を顧みるとまがなかった。そのすきをねらって、日本帝國主義とアメリカ帝國主義は、中国への侵略に拍車をかけた。とりわけ、日本帝國主義はドイツにたいする宣戦を口実に、ドイツの「勢力圏」であつた中国山東省の青島市を武力占領し、膠済（青島—濟南）鉄道の沿線をその支配下におさめた。このとき、中華民國大總統の位をかすめとつた袁世凱は、日米帝國主義にそそのかされ、皇帝にのしあがろうと夢みていた。その野心を見すかした日本帝國主義者は、一九一五年初めに、中国を完全に日本の植民地に変える「二十一カ条」①の要求を袁世凱につきつけた。それとひきかえに、帝位につくことを後押しすると約束した。頭に血ののぼつた袁世凱は國家主權と民族利益を売りわたし、「二十一カ条」をうけいれた。そのため、全国人民が怒とうのような愛國・反袁闘争をまきおこした。その結果、袁世凱は人心を失い、皇帝の夢もあえなくついえ、ついに万人の罵声（ばせい）をあびて一九一六年六月に死んだ。北京反動政府の権力は、まもなく袁世凱の部下である軍閥段祺瑞の手ににぎら

れた。日本とアメリカに鼓舞され、段祺瑞政府は一九一七年、ドイツに宣戦を布告した。

一九一三年以来、ブルジョア革命派の指導者孫中山（一八六六年～一九二五年）は、袁世凱と段祺瑞に反対する闘争に従事したが、なんらの成果もあがらなかった。帝国主義と封建軍閥の統治下で、中国人民はあいかわらずどん底生活をおくっていた。

第一次世界大戦中、イギリス、フランス、ロシア、ドイツなどが对中国侵略を一時ゆるめたので、中国の民族資本主義は比較的はやく発展できる機会にめぐまれた。当時、発展のもつとも速かったのは紡績業と製粉業で、大戦の始まった一九一四年から終戦の一九二〇年前後にかけて、およそ四、五倍に増大した。民族資本主義の発展にともない、弱体だった中国の民族ブルジョア階級の力は強化され、知識人の隊列も拡大された。一九一五年九月、急進的なブルジョア民主主義者陳独秀は雑誌『青年』（のちに『新青年』と改名）を創刊し、「科学」と「民主」を旗じるしに、さかんに西方ブルジョア革命期の民主主義思想で中国の伝統的な封建思想を攻撃した。こうして、中国近代の新文化運動が展開された。この運動は当時の歴史的条件に完全に合致していたので、一時全国を風靡^びし、一大新思潮を形成した。

中国の労働者階級は、まず中国にある帝国主義企業に姿をあらわし、しかも、外国資本主義の反対勢力として発展してきた。その歴史は中国の民族ブルジョア階級よりも早い。中国の民族資

本主義が発生し、発展するにつれ、中国の労働者階級も漸次成長し、とくに第一次世界大戦中、中国の資本主義がいちだんと発展したため、労働者階級もいっそう拡大され強化された。大戦前、中国の産業労働者は六十五万人にすぎなかったが、大戦終結後、この新興の革命階級は二百万人前後にふえていた。これによって、中国におけるマルクス主義の伝播に階級的な基礎がうちたてられた。

中国の労働者階級は数も少なく、誕生してから日も浅かったが、新しい生産力の代表者であった。帝国主義、ブルジョア階級、封建勢力という三重の抑圧と搾取をうけていた中国の労働者階級は、世界でもまれにみる苦難をなめつくしてきたため、もともと確固とした、もともと徹底した革命的闘争性をそなえていた。半植民地・半封建の中国には、ヨーロッパのような社会改良主義を生む経済的基盤がなかったので、少数の労働貴族をのぞいて、労働者階級全体は結束しており、革命的であった。また、中国の労働者は集中度が高く、強大な政治勢力を形成するのに有利であった。さらに中国の労働者は、破産した農民がその多数を占め、広はんな農民とおのずとつながりをもっているのです、農民と緊密な同盟を結ぶのに容易であった。それゆえ、労働者階級は中国革命のもっとも基本的な原動力となり、指導的階級となったのである。

一九一七年、ロシアで偉大な十月社会主義革命がおこった。それまで、中国の先進的な人びと

は救国と富国強兵のため、たいへんな苦勞をかさねて西方諸国に革命の真理をもとめるとともに、それにならって中国をブルジョア近代国家に建設しようとした。だが、かれらのたゞ重なる奮闘はことごとく水泡に帰した。いまや十月革命に中国人民解放の曙光をみいだしたかれらは、意欲的にマルクス・レーニン主義をうけいれた。一九一八年、草創期のマルクス主義者李大釗同志（一八八九年～一九二七年）は、あい前後して『仏露革命の比較観』、『庶民の勝利』、『ボルシェビズムの勝利』などの論文を発表し、十月革命を熱烈にたたえ、この世界的意義をもつ偉大な勝利に歓呼し、中国人民は十月革命の照らす道にそって進むべきだと指摘した。李大釗らはまた『每周評論』などの刊行物を発行し、マルクス主義の伝播につとめた。それ以来、マルクス・レーニン主義は中国で広まりはじめ、新文化運動の内容も新たな変化をみせ、中国人民の自覚も日一日と高まってきた。

一九一八年十一月、第一次世界大戦は終結した。一九一九年一月、イギリス、フランス、アメリカ、日本などの戦勝国は、「講和会議」なる看板のもとに、パリで贓品^{ぞう}の山わけをめぐるてしをぎを削った。中国は「戦勝国」として、代表団をおくった。中国代表団は国内世論におされ、中国における外国の特権廃棄、山東省におけるドイツの「権益」回収、「二十一カ条」の撤廃などを会議に提出した。だが、帝国主義の強盗どもは、中国の正義になかった要求をはねつけたば

かりでなく、山東省におけるドイツの「権益」を正式に日本に譲りわたすことをきめたのである。

「パリ講和会議」で中国がこうむった屈辱は、中国人民のはげしい憤りをよびおこした。「講和会議」に大きな幻想をいだいていた者も、いまやすっかり失望し、憤まんやる方なかった。四月三十日、「講和条約」の中国山東省問題にかんする条項が確定された。そのニュースはたちまち中国につたわった。五月三日、北京各界であいつぎ抗議集会がひらかれた。

五月四日、三千名をこえる北京の学生が天安門前で集会をおこなった。かれらは手に手に「二十一カ条を取り消せ」、「青島を取り返すまでたたかい抜こう」などと大書したノボリをもち、「外に国権をあらそい、内に国賊をこらしめよ」「講和条約の調印を拒否せよ」などのスローガンを声高らかに叫んだ。同時に、悪評高い親日派の売国奴曹汝霖（交通総長。袁世凱政府の外務次官をつとめ、日本との「二十一カ条」調印にあたった）、章宗祥（駐日公使。日本からの借款を手がけた）、陸宗輿（造幣局総裁。「二十一カ条」調印当時の駐日公使）の罷免を要求した。

学生たちは隊列がととのうと、すぐデモ行進にうつった。デモ隊は大使館街の東交民巷をめざして進んだ。ところが、東交民巷へのコースが阻止されたため、学生たちはいちだんと激昂した。かれらは、まず売国奴三人の罪を問うことにきめた。そこで、デモ隊はコースを変更し、趙家楼

の曹汝霖の邸宅に向かった。邸内へ突入した学生たちは、曹邸に居あわせた章宗祥をなぐり、屋敷に火を放った。ふきあがる炎をみて、人びとは歓声をあげた。

北京の反動政府は、学生たちの愛国行動に高圧的な手段をとり、その日のうちに、デモ行進に加わった三十一名の学生と一人の市民を逮捕し、裁判にかけると揚言した。あくる五月五日、北京の学生はいっせいに授業をボイコットし、さらに講演団を組織したり、さまざまな刊行物を発行したりして宣伝活動をすすめた。帝国主義とくに日本帝国主義にそのかされた反動政府は、学生たちの愛国行動にいっそうの狂気じみた弾圧を加えるとともに、切り崩しや買収などの卑劣な手口をもてあそんだ。

六月三日、北京の約二千名の学生が街頭に出て講演をおこなったが、二百名近くが逮捕された。六月四日、前日に倍する学生が街頭宣伝にくり出したが、さらに七百名も逮捕された。

五月四日に始まった北京の学生の愛国行動は、たちまち全国各地に波及した。各大都市で愛国行進や各種の集会がつぎつぎとおこなわれ、多くの中小都市、さらには若干の町村もその波に洗われた。これに呼応した海外の華僑や留学生も少なくなかった。このようにして、全国的な愛国運動はますますもりあがり、新しい段階に突入した。これ以後、運動の中心は、北京から当時の中国最大の工商業都市上海にうつり、労働者階級が運動の主力軍となった。

六月五日、上海の労働者は大規模なストライキをうち、十日、それは高潮に達した。スト参加労働者の数は六、七万人にのぼった。上海の水上、陸上の交通はすっかりマヒした。そのほか、長辛店と唐山の鉄道労働者、天津の人力車夫、杭州、九江などの労働者もストライキをおこなった。済南の労働者もさまざまな愛国運動を展開した。学生たちの励ましと労働者たちの助けのもとで、六月五日から上海の商人も同盟罷業をおこなった。その他の多くの都市の商人もこれにならった。

全国人民の愛国運動の波におされ、北京政府は逮捕した学生の釈放および曹汝霖、章宗祥、陸宗輿らの売国奴の罷免をよぎなくされた。だが、帝国主義の気嫌をそこねることを恐れる北京政府は、依然としてパリ講和会議に出席している代表に講和条約に調印せよという訓電をだした。それをきっかけに、全国でまたもや講和条約調印拒否の闘争がまきおこされた。各地の人民はあいついで集会をひらき、北京へ請願の代表をおくった。講和条約の調印拒否を要求する手紙や電報が、引っぱりなしに北京とパリへ舞いこんだ。調印式の六月二十八日、パリ在住の華僑労働者と中国留学生たちが中国代表団の宿舎をとり囲んだため、中国代表はついに条約に調印する勇氣がなかった。こうして、「五・四」愛国運動は初歩的な勝利をおさめたのである。

愛国運動が展開されるにつれ、新文化運動はいちだんとひろまり、マルクス・レーニン主義の

伝播もはやめられ、しかもしだいに新文化運動の主流となった。

「五・四」運動は、辛亥革命には見られなかった、徹底した妥協のない反帝国主義、反封建主義の運動である。「五・四」運動は、中国の新民主主義革命、すなわち労働者階級の指導する人民大衆の反帝・反封建の革命の始まりをしるものであり、これを転機に、中国の歴史はまったく新しい時期にはいった。「五・四」運動はまた、のちに生まれる中国共産党のために思想面、幹部面から条件をととのえた。

「五・四」運動の期間中、毛沢東同志は湖南省で革命闘争を指導していた。中国人民の偉大な指導者と教師毛沢東は、一八九三年、湖南省湘潭県韶山郷の一農民の家に生まれた。はやくも学生時代から、かれは中国の歴史と現状の研究に意をそそぐとともに、社会状況の調査に従事した。一九一六年、かれは湖南省中部と西部の各県におもむき、農村の実状や農民の生活をしらべて回った。一九一七年から一九一八年にかけて、かれは進歩的な青年たちを集めて新民学会を結成し、また長沙に労働者夜学校をもうけ、労働者たちとも密接なつながりをむすんだ。一九一八年八月、かれは新文化運動の中心である北京へやってきた。当時のかれはまだ急進的な民主主義者であったが、その思想の主流は、すでにマルクス主義へかたむいていた。一九一九年、毛沢東同志が湖南省にもどってきたときは、ちょうど「五・四」運動がもりあがりはじめたころであっ

た。かれはすぐさま新民学会会員を中核に、学生界、教育界と他の各界の人びとを指導して、あらゆるような闘争をくりひろげた。一九一九年七月、毛沢東同志は長沙で『湘江評論』を発売し、『民衆の大連合』という重要な論文を発表した。一九一九年の末、かれはふたたび北京にやってきた。北京で、かれは真剣にマルクス・レーニン主義の古典の研究にはげんだ。これ以後、かれは確固不動のマルクス主義者になった。一九二〇年、毛沢東同志は湖南省で積極的に労働運動と党建設の活動にたずさわった。その後、かれはまた農民運動のもっとも名高い、もっとも正しい指導者となった。「五・四」運動当時から、毛沢東同志の革命活動は、マルクス・レーニン主義と中国の實際を結びつけ、知識人と労働者・農民大衆を結びつけることを指向していた。かれは、ひとりの急進的な民主主義者として出発し、さらにマルクス主義をうけいれてマルクス主義者になるとともに、マルクス主義の思想でもって労働者・農民大衆を教育し、組織した。そればかりでなく、闘争を通じて勤労人民の思想感情を知り、これを身につけ、みずからの世界観を根本から改造することによって、確固としたプロレタリア階級の革命戦士になった。毛沢東同志の方向は、「五・四」運動以後の中国の革命的知識人が歩んできたもっとも正しい方向である。

一九一五年一月、日本帝國主義は袁世凱に、皇帝になるのを支持する条件として、中国を滅亡させようとする「二十一カ条」の要求を提示した。その主な内容は、つぎのとおりである。日本が山東省におけるドイツの一切の権益を継承するとともに、その拡大もみとめること。日本が東北南部および内蒙古東部一帯で工商業、土地、鉄道、鉱山などの特権を享有すること。旅順、大連の租借期限と関連鉄道の租借期限を延長すること。中国沿岸の港湾と島嶼を他国に租借または割譲してはならないこと。中国政府が政治、財政、軍事の顧問として日本人を招へいすること。中国の警察行政と兵器工場を日華合併にすること、などである。袁世凱は皇帝になりたい一心から、個別的な条項を後日協議することにして、「二十一カ条」を受諾した。